

中学生の集団いじめ予防に関連する要因の検討

-学級の「人気者」に注目して-

研究代表者

共愛学園前橋国際大学助教（東京大学教育学研究科博士課程） 唐 音啓

1.まえがき

学校社会におけるいじめは、1980年代より社会問題のひとつとして取り上げられるようになり、その実態把握や解決に向けた取り組みが多々なされているほか（河村・田上，1997；永井・山崎，2015），平成25年度にはいじめ防止対策推進法が施行された（文部科学省，2013）。学術分野においてもいじめに関連した多くの研究が蓄積されていながら、依然、令和2年度の国内のいじめ認知件数は51万7163件を記録しており（文部科学省，2022），現存の防止策が功を奏しているとは言い難い。その背景には、いじめの防止に効果的な知見を提供する研究が不足や（大西，2015），いじめの発生機序の理解を目的とした研究の乏しさがあると考えられる。

いじめは、いじめが生じている集団や学級全体の問題であり、加害生徒と被害生徒の二者関係にとどまるものではない（森田・清水，1986）。加えて、国内におけるいじめのほとんどは学級内で生じており（金綱，2015），いじめ問題を扱う上では、その学級構造に視点を向ける必要があるだろう。なお、近年では、いじめの抜本的な要因として、学級構造を考える枠組みの一つである、学級内地位の概念が注目されている。学級内地位とは、学級で生じる社会的地位の階層関係を指し（e.g.,森口，2007），「スクールカースト」や「クラス内ステイタス」といった用語を中心に、学級内地位といじめに関する実証的な検討が国内で進められつつある。例えば、久保田（2018）は、中学生を対象とした質問紙調査によって、学級内で「クラス内ステイタス」が生じているほどいじめが発生しやすくなる可能性を示している。一方で、水野・加藤・太田（2019）は、中学生を対象とした大規模な質問紙調査より「スクールカースト」の自己認知といじめとの関連が非常に小さなものであったことを指摘している。水野（2019）の指摘にもあるように、我が国では学級内地位に関連した実証的な知見が不足している現状があり、とりわけ、学級内地位といじめとの関連については、未だ一貫した知見が得られておらず、さらなる検討が必要とされる。

なお、学級内地位の概念は、欧米では学級全体や周囲の友人関係に与える影響の大きさの指

標として扱われ、人気 (Popularity) 研究として知見が蓄積されている。人気研究においては、「認識された人気 (Perceived Popularity)」と「ソシオメトリック人気 (Social Popularity)」が弁別して扱われており、具体的には、「認識された人気」は、学級内で「目立っていること、中心性を持つこと、かっこよいことを反映する概念」を意味し、対して「ソシオメトリック人気」は、周囲から好感を持たれ、仲間から受容されていることを意味する (水野・唐, 2020)。「認識された人気」と「ソシオメトリック人気」は、両者ともに学級内地位が高いとされているものの、その適応は異なり、例えば、「認識された人気」は、他者へのいじめ加害行為と正の関連を示す (Caravita & Cillessen, 2012) 一方で、「ソシオメトリック人気」は向社会的行動の多さ (Gangel et al., 2017) と関連することが明らかにされている。

このように、欧米における人気研究の知見より、学級内地位という概念には「認識された人気」と「ソシオメトリック人気」という性質が異なる二つの人気が含まれると想定できるにもかかわらず、本邦では近年注目されつつある概念であることも相まって、両者の弁別がなされていないまま検討がなされているという課題を抱えていると考えられる。

2.目的

そのため、本研究では、近年、いじめの抜本的な要因であると注目されつつある学級内地位について、(1) 学級内で「認識された人気」、「ソシオメトリック人気」を持つ生徒たちの存在と学級風土との関連および、(2) 学級内で「認識された人気」、「ソシオメトリック人気」を持つ生徒たちの具体的な様相と、彼らがいじめに関わっていた具体的な事例について検討することを目的とする。

はじめに、(1) に関して、人気研究における知見が欧米において蓄積されてきたものであることから、国内においても類似した概念が存在しうるかを、中学生を対象としたアンケート調査を実施することによって、学級において「認識された人気」と「ソシオメトリック人気」の両者が弁別されているか否かを明らかにしたい。その後、「認識された人気」と「ソシオメトリック人気」の自己認知と学級風土との関連を検討することを目的とする。なお、学級内地位に対する認識が最も高くなる学校段階が中学生であること (石田, 2007) から、本研究では研究対象を中学生とした。

続いて、(2) に関しては、大学生を対象とした回顧的なインタビュー調査を実施することによって「認識された人気」と「ソシオメトリック人気」を持つと考えられる生徒たちといじめとの関わりの有無を検討し、その中で特に、いじめに関わっていた事例に注目することで、彼らが具体的にいじめにおいてどのような立場にあったかを明らかにする。なお、(1) と同様、中学生を対象とした調査を予定していたものの、インタビュー調査実施予定時期が新型コロナウイルスによる複数回の緊急事態宣言を伴う期間だったため、中学生を対象とした対面の

インタビューから大学生を対象とした回顧的なオンラインインタビューへと変更した。

3.方法

3-1. 中学生を対象としたアンケート調査（質問紙・web調査）

調査方法：質問紙およびwebフォームの内容に関して、調査協力校の教頭の下承を得たあと、内容を郵送で送付またはメールで送信した。その後、ホームルームの時間などに、学級担任により調査および回答が任意であることに関する説明等を受けたのち、生徒に対して回答を求めた。なお、本アンケート調査を実施するにあたって、東京大学倫理審査専門委員会の承認を受けた。

調査協力者：中学生1-3年生973名から協力が得られた。（A中学校：質問紙配布・回収，実施時期2021年10月，3年生180名，B中学校：webフォーム調査，実施時期2021年9-10月，1-3年生237名，C中学校：webフォーム調査，実施時期2021年10月-2022年3月，1-3年生556名）

調査内容および手続き：新版中学生用学級風土尺度（伊藤・宇佐美，2017）のうち、「学級への満足感」と「リーダー」項目，対象別向社会的行動尺度（村上・西村・櫻井茂男，2016）のうち、「友だちに対する向社会的行動」項目，中学生用攻撃行動尺度（高橋・佐藤・野口・永作・嶋田，2009），学校適応感尺度（小杉，2014），および学級内地位項目といじめ加害・被害項目への回答を求めた。実施にあたっては，調査協力校に向けて，回答が任意であること，回答の途中で回答を辞めてよいこと，データは匿名化され研究目的以外に使用されることはないことを記載した文書を配布したほか，同様の内容を質問紙冊子およびwebフォーム冒頭に記載し，生徒への説明を行うよう，各担任への依頼文書を作成し配布した。なお，調査協力を依頼した中学校1校においては，項目検討の結果，攻撃行動項目およびいじめ関連項目を除いた項目での実施となった。

3-2. 大学生と対象とした回顧的なインタビュー調査

調査方法：調査を実施する前に対面にて，女性4名を対象にパイロットスタディを実施した。その後，オンラインアプリ（Zoom）を使用して，1対1の半構造化インタビューを実施した。下記に記載した研究への同意，録音の同意，謝礼受け取りの署名等は全てオンラインフォームにて実施した。なお，本インタビューを実施するにあたって，東京大学倫理審査専門委員会の承認を受けた。

調査協力者：研究代表者が所属している研究室内の同僚が勤務している大学等にて，大学1-4年生を対象に「中学生時代の学級の雰囲気や友人関係について」というテーマで，研究内容（30～60分ほどオンライン上で半構造化インタビューの実施，webフォームへの回答），謝礼

が記載されたチラシを配布し、調査協力者を募った。その結果、18名（男性4名、女性14名）の協力が得られた。実施時期2020年11月であった。

調査内容および手続き：調査はインタビューガイドを使用して行われた。調査協力者への主な質問は以下の通りである。（1）あなたがいたクラスの中で、中心的で目立っていたような人はいましたか。（2）あなたがいたクラスの中で、広く好かれ、受け入れられているような人はいましたか。（3）学級の中でいじめを見たり聞いたりした経験はありましたか。

なお、実施にあたっては、Zoomを使用したオンラインインタビューであったため、画面をオンにしての参加および録音への同意のほか、質問項目への回答が任意であること、回答の途中で回答を中断してよいこと、録音データは特定の部分の消去を求めることができること、録音データは匿名化され研究目的以外に使用されることはないことを記載したオンラインフォームの画面を共有しながら口頭で説明を行い、調査の協力を得た。

4.結果

紙幅の都合上、本研究の目的に関連した結果を中心に記述する。また、4-2. 大学生を対象とした回顧的なインタビュー調査の結果では、倫理的配慮の観点から、語りの内容を修正している部分がある。

4-1. 中学生を対象としたアンケート調査（質問紙・web調査）

本調査で得られた回答（男子450名、女子510名、未回答12名）において、学級で「認識された人気」「ソシオメトリック人気」に当てはまる生徒が思い浮かぶかどうかに関する項目の回答結果をTable1、各尺度得点の基礎統計量および相関表をTable2に示す。

Table1. 「認識された人気」「ソシオメトリック人気」に当てはまる生徒の有無

	思い浮かぶ		思い浮かばない		未回答	
	%	人数	%	人数	%	人数
認識された人気	68%	664	31%	303	1%	5
ソシオメトリック人気	61%	597	38%	366	1%	9

まず、学級における「認識された人気」と「ソシオメトリック人気」の概念の弁別を目的として、認識された人気は「（1）クラスの中で、もっとも中心的で、目立っているような人」、ソシオメトリック人気は「（2）クラスの中で、もっとも好かれていて、受け入れられているような人」の2項目について、「思い浮かぶ/思い浮かばない」で回答を求めた。その結果、Table1の通り、「思い浮かぶ」と回答した割合は、認識された人気のほうがソシオメトリ

ック人気よりもやや高く、「思い浮かばない」と回答した割合は、ソシオメトリック人気のほうが認識された人気よりもやや低かった。加えて、それぞれ思い浮かべた人物について、「(1)と(2)で違う人物を思い浮かべた」と回答した割合は47% (452人)、「(1)と(2)で同じ人物を思い浮かべた」と回答した割合は17% (169人)であった。

Table2. 各尺度得点の基礎統計および相関

	<i>M</i>	<i>SD</i>	1	2	3	4	5	6	7
1 学級風土 (リーダーの有無)	3.6	1.01							
2 学級風土 (満足感)	4.08	.79	.08*						
3 いじめ	4.82	2.62	.13*	-.14**					
4 向社会的行動	2.89	.70	.21**	.32**	.03				
5 攻撃行動	0.35	.49	.03	-.20**	.40**	-.10*			
6 認識された人気 (自己評定)	1.31	.46	.12**	.20**	.04	.18**	.12*		
7 ソシオメトリック人気 (自己評定)	1.38	.49	.00	.35**	-.02	.35**	-.10	.44**	
8 学校適応感	3.07	.47	-.04	.54**	-.22**	.28**	-.18**	.17**	.37**

* $p < .05$. ** $p < .01$

次に、「認識された人気」と「ソシオメトリック人気」の自己認知と学級風土との関連を検討するため、「認識された人気」と「ソシオメトリック人気」項目と新版中学生用学級風土尺度の下位尺度である「リーダーの有無」および「満足感」との関連について、相関分析を行った。その結果、Table2より、「認識された人気」は「リーダーの有無」($r = .12, p < .01$)、「満足感」($r = .20, p < .01$)との間に、弱い正の相関関係がみられた。「ソシオメトリック人気」は、「リーダーの有無」との間に相関関係はみられず、「満足感」($r = .35, p < .01$)の間では正の相関関係がみられた。なお、「認識された人気」と「ソシオメトリック人気」の自己認知($r = .44, p < .01$)の間には正の相関関係がみられた。そのため、「認識された人気」と「ソシオメトリック人気」の両者と正の相関関係がみられた「満足感」について、偏相関分析を行った。まず、「ソシオメトリック人気」を統制した上で、「認識された人気」と「満足感」の偏相関係数の算出を行った結果、有意な関連はみられなかった($r_s = .05, p = .14$)。また、「認識された人気」を統制した上で、「ソシオメトリック人気」と「満足感」の偏相関係数の算出を行った結果、有意な正の偏相関がみられた($r_s = .30, p < .01$)。

4-2. 大学生と対象とした回顧的なインタビュー調査

インタビュー協力者は18名(男性4名, 女性14名)であった。インタビュー内容の分析にあたっては、質的データの分析ソフトであるMAXqdaを用いて整理を行った。今回の分析では、「認識された人気」または「ソシオメトリック人気」を持つ生徒たちの様相について、実際の

語りを参照しながら概観したのち、いじめについて言及された事例を抽出し、その語りを整理することとする。なお、倫理的配慮の観点より、インタビューの語りにて出現する「認識された人気」または「ソシオメトリック人気」のおよびインタビュー研究協力者の性別は伏せる。

4-2-1. 「認識された人気」

本インタビューは半構造化インタビューであるため、「認識された人気」を持つ生徒たちの様相をまとめるにあたっては「あなたがいたクラスの中で、中心的で目立っていたような人はいましたか」という質問項目によって得られた語りを分析対象としているほか、他の質問項目に対する回答の流れの中で語られた「認識された人気」を持つ生徒たちに関する内容も分析の対象とした。なお、認識された人気を持つ生徒たちに関する語りについては、〈ムードメーカー〉〈逆らえない〉の2つの観点から整理したい。

はじめに、〈ムードメーカー〉に分類された語りに関しては、語り手によってその内容が大きく異なり、ポジティブ・ネガティブ両面への言及が見られた。ポジティブな側面として、例えば、Aさんは次のように語っている。

：やっぱりその子は常に中心にいたので、授業中とかでもかなりふざけるんですよ。ふざけちゃいけないのに、ふざけるんですよ。で、また先生に怒られてるんですけど、それがまたいいなって、逆に思ったんですよ。あの、良くはないですけど、何か、すげえおいしいところ、持ってかれたなっていう気が。

Q：そうなんですか。

A：そうなんですよ。まあ、「ずるいな、あいつ」って思っていましたけど。

Q：結構、じゃあ、笑いを持ってく感じの人だったんですかね、クラスの。

A：そうですね。本当に笑いを起こす人でしたね。

Aさんは、Aさんのクラスで認識された人気を持っていた生徒について「常に中心にいた」「笑いを起こす人」と表現しており、学級全体を楽しませる存在であったことが読み取れる。「授業中とかでもかなりふざける」「先生に怒られてる」と語っているように、本来であれば好ましくないような態度や状況であるにもかかわらず、「それがまたいいな」とあるように、肯定的な印象を認識された人気を持っていた生徒に対して持っていたことが伺える。

一方で、〈ムードメーカー〉がネガティブな文脈であらわれたものとして、以下の語りを挙げたい。

B：何かでも仕切るときはちゃんと仕切ってくれるんですよ。何かふざけるときはめっちゃふざけてみんなのことを笑わしてくれるし仕切るときはちゃんと仕切ってくれるしできるんですけどほんとに何かキレるときはまじでやばいっていう感じなんで。何か別にみんなから嫌われてるわけじゃなかったなっていう。

Q：でもキレさせないようにキレさせないようにって。

B：そうですね。キレるとこう何か自分が敵に回されたらやばいなと思って結構何かみんな保守的にカバーしてくイメージはあります。

Bさんは、Bさんのクラスで認識された人気を持っていた生徒に対して、「仕切るときは仕切ってくれる」「みんなのこと笑わしてくれる」とポジティブなムードメーカーである印象を抱いたものの、「キレるとこう何か自分が敵に回されたらやばいなと思って」という恐れのような感情も抱いていたという。加えて、「何かみんな保守的にカバーしく」とあるように、恐れのような感情を抱いていたのが自分だけではなく、学級全体が、認識された人気を持つしていた生徒に対してとりわけ、「何かにキレるとき」に機嫌を伺うような状況があったことが読み取れるだろう。一方で、冒頭のポジティブな印象や、「別に嫌われてるわけじゃなかったな」との語りから、機嫌を伺うような状況以外では比較的肯定的に受け止められていた存在であると捉えることもできよう。

続いて、〈逆らえない〉に分類された語りに関しては共通して、認識された人気を持っていた生徒に対するネガティブな側面への言及が見られた。例えば、Cさんは、次のように語っている。

C：何か普通に暴言とかも普通に吐くから。何かその暴言吐いてる子とも、私はそんな暴言とか絶対吐かないですけど、その暴言吐いた子とか、ちょっとあの一、ほんとに「えっ」みたいな。何でこの行動すんのみみたいな子も結構仲良くて、普通に。たまにめっちゃたまに遊ぶぐらいな、何か。話したりとかするぐらいの仲だったから、逆に何かそれも言えなくて、何か。「えっ、何でそういうこと言うの？」とかも何か。ただその子はその子なりの何か考えがあんのかなみたいなことで。うーん。どうなんだろう。

Cさんは、認識された人気を持つ生徒について「暴言吐いてる子」と表現し、その言動が理解し難いという姿勢を見せながらも、「逆に何かそれも言えなくて」「『えっ、何でそういうこと言うの？』とかも何か」とあるように、そうした言動を制止するようなことはできなかつ

たと語っている。このような葛藤について「その子はその子なりの何か考えがあんのかな」といった解釈をすることで、Cさんなりに、〈逆らえない〉状況への対処を試みようとしていたことが伺える。

こうした、認識された人気を持つ生徒に対する〈逆らえない〉側面は、Dさんの語りにおいてもみられている。

D：学校行けなくなるなって、安全に。安心して行けなくなるなって思ってて、なんか。それは単純に私がすごいそういうのが怖い性格だったからっていうのもあるんですけど、何となく自分にすごい自信もないし、なんか何だろう、なんか、そういう自分がああ、同じような目に自分も遭ったらどうしようみたいな、そういう感覚もすごいあったし。だからなんかめっちゃめっちゃあれでした、怖かったですね。なんか普通にああ、でもビクビクしてたら絶対やばいと思ってたんで、ああ、堂々として、しゃべんなきゃいけないときは堂々として、堂々と、もうああ、めっちゃめっちゃ愛想良くして、絶対に敵に回したくないって思いでやり過ぎしてたっていう感じです、なんか。

Dさんは、自分自身について「単純に私がすごいそういうのが怖い性格」と述べており、いわゆる認識された人気自体に「怖かった」印象を持っていながら、そのような自分自身の感情に反して、「しゃべんなきゃいけないときは堂々として」「めっちゃめっちゃ愛想良くして」とあるように、認識された人気を持つ生徒に対して「絶対的に回したくないって思いでやり過ぎしていた」と語っており、学級がもはや、Dさんにとって安心できる場ではなかったと捉えることができるだろう。

なお、Eさんは、他の学級であったものの、〈逆らえない〉と感じた雰囲気を経験した以下のように説明している。

E：中3のときに、なんかすごい絶対的権力を持つ子がいるみたいな。結構だから、結構有名で、その子結構学年でも有名で。結構権力を持ってて、なんかその子が、「あいつ、はぶろうぜ」みたいに言ったらなんか、なんか従わなきゃいけないみたいな。絶対的権力がある子がいましたね。だから、その人と同じクラスになったら、なんかもうほんとに、1年間やばいみたいな。

Eさんは、認識された人気を持つ生徒について「絶対的権力持つ子」と語り、その生徒の言動には、例え「『あいつ、はぶろうぜ』」のような理不尽なものである場合でも「従わなきゃ

いけない」という暗黙の了解が学級，ひいては学年内にあったことを述べている。

上述したように，語りから受ける認識された人気を持つ生徒たちの印象は非常に多面的でありながら，その様相としては主に〈ムードメーカー〉であり〈逆らえない〉雰囲気である姿が語りから抽出された。

4-2-2. 「ソシオメトリック人気」

「ソシオメトリック人気」を持つ生徒たちの様相をまとめるにあたっては，「あなたがいたクラスの中で，広く好かれ，受け入れられているような人はいましたか」という質問項目への回答を分析対象としているほか，他の質問項目への回答の流れの中で語られた「ソシオメトリック人気」を持つ生徒たちに関する語りも併せて分析の対象とした。なお，ソシオメトリック人気を持つ生徒たちに関する語りについては共通した部分が多く，以下では〈人望の厚さ〉の観点からその内容をまとめることとする。

ソシオメトリック人気を持つ生徒の〈人望の厚さ〉について，Fさんは次のように語っている。

F：なんかすごい優しくって，あとなんかしっかりしててっていう人が，子が1人いて。その子は結構，みんなから好感度高かったですね。えーと，私，その子と同じ部活で。部活で，あと，その子とも結構仲良かったんですけど。何か，学級委員とかもやってて。なんか自分の意見とかが結構しっかり持ってる子だなって思いました。しっかりしてる子だなっていう。いう子がいます。

Fさんは，ソシオメトリック人気を持つ生徒を「すごい優しくって」「しっかりしてる子だな」と語っており，肯定的な印象を持っていることが伺える。また，「学級委員とかもやってて」とあるように，Fさんの学級において，ソシオメトリック人気を持つ生徒が，他の生徒たちをまとめる役割にあつたことを述べている。

続いて，同じく，ソシオメトリック人気を持つ生徒の〈人望の厚さ〉について説明している語りを取り上げたい。

G：その子が，あの，生徒会長だったんですけど。それで何か，すごく勉強もできて，何か性格もすごく良くて。で，何か，何かすごい，あの一，どの子にも何か平等に話せる。何か，あ，そうですね，そんな感じで，何かほんとにすごくいい子だなっていう感じの印象

で、はい、でした。

Gさんは、「何か性格もすごく良くて」「どの子にも何か平等に話せる」と語っているように、ソシオメトリック人気を持つ生徒に対して、その言動に非常に肯定的な印象を持っていることが伺える。そして、こちらも、「生徒会長だった」とあるように、学級ひいては学校全体をまとめる立場にあったことを述べている。

最後に、Hさんは、ソシオメトリック人気を持つ生徒の普段の印象や言動について以下のよう

H: まあ、その人はどっちかという、毎年学級委員長になるタイプで、何か、あの、緩衝材？何かまとめるもいいし、何か。自分の意見をはっきり言うけど、何かそれも、「あ、そういうのもあるよね」みたいな感じで、何かそういう、結構いっつもにこにこしてるタイプで、で、何か。

Hさんの、「緩衝材？何かまとめるのもいいし」「結構いっつもにこにこしてるタイプ」との語りからは、ソシオメトリック人気を持つ生徒の言動が他の生徒たちに対して、ポジティブな影響を与えている可能性が伺えるだろう。そして、「自分に意見をはっきり言う」とあるように、他者に優しさを示すだけでなく自分自身の考えをしっかりと伝えることができるような生徒であり、加えて、こちらも「毎年学級委員長になるタイプ」と学級をまとめる立場にあったことを述べている。

上述したように、ソシオメトリック人気を持つ生徒たちに関する語りからは、比較的一貫した印象を受けた。例で挙げた語りの中でみられた「いい子」「性格が良い」といった表現は、他の研究協力者の語りの中でも多くみられたため、〈人望の厚さ〉の観点から内容を概観した。

4-2-3. 「認識された人気」を持つ生徒が「いじめ」に関わる事例

最後に、認識された人気を持つ生徒がいじめに関わっていた事例についてまとめたい。「学級の中でいじめを見たり聞いたりした経験はありましたか」の質問項目について、「経験がある」と回答した研究協力者に対しては、そのいじめの内容や、研究協力者本人の立場、認識された人気を持つ生徒とそのいじめとの関わりの程度を、研究協力者が回答可能な範囲で語ってもらうこととしていた。以下では、認識された人気を持つ生徒がいじめに関わっていた1事例を取り上げ、その内容を概観する。なお、倫理的配慮の観点から、語りの内容を修正している

部分がある。

Gさんの事例では、認識された人気を持つ生徒から、自分自身がいじめの標的になっていた経験が語られている。

G：えーっと、夏休み入る前ぐらいから、結構、クラスで男女共に仲いいみたいな感じだったんですけど、なんかあんまり話してくれないなと思って。夏休み終わって学校へ行ってだんだん話してくれなくなって、なんか笑われたり。うーん。で、仲いいはずの子が、なんか、教室に入れてくれなかったりとか。

Q：入れてくれない？

G：何だろうな。その、悪ノリの一環で、私がいけない時に教室で、なんか「あいつとしゃべるな」みたいな話を聞いたりとかもあったり、で、他の子もあんま、見てるだけっていうか、関わらない。（中略）で、おとなしくしてて、まあ、それでもちよっかいをかけられるんですけど、物が壊れちゃったりとか。（中略）あとプリント回ってこなかったりとかもありましたね。その、手渡しでとかの時に嫌な顔されたり。（中略）ある時に、なんか本当に何でもない時に、その、今までいじめてた人がクラスの前で急に私に話しかけてくれて。

「あっ、話し掛けてくれた」と思って。びっくりしちゃって。で、そこで、多分みんなも、あっ、この人が話してるから私には話していいんだみたいな感じになって。で、そっからはいじめがだんだんなくなって。私に対する。その分、誰かに行ったりとかではないんですけど。

Gさんは、自分自身が被害者となったいじめの始まりを「だんだん話してくれなくなって」「教室に入れてくれなくなったりとか」と語り、本来仲が良く、行動を共にするような友人たちの態度が徐々に変化していったことを述べている。そして、「物が壊れちゃったりとか」と、いじめの内容がエスカレートしていく一方で、「他の子もあんま、見てるだけっていうか」とあるように、学級内でも傍観をしている立場の生徒が多かったと話した。もともと、ある日急に、いじめの加害者である認識された人気を持つ生徒がGさんに急に話しかけたことをきっかけに「多分みんなも、あっ、この人が話してるから私には話していいんだみたいな感じになって」と、それまで学級内で続いていた、Gさんへのいじめが徐々になくなっていったという。Gさんはいじめがなくなった前後の状況について、次のように語っている。

G：ね。でも、それがなかったら。うん。多分一生終わんなかったんだろーなみたいな。

Q：ああ、本当に。

G：というぐらい。そう。衝撃の時でした。

Q：衝撃ですね。

G：（中略）なんかしょうがないなで割り切るしかなくて。そうですね。その話について他の子と触れたりとかっていうのはもうなかったですね。

Q：そっか、そっか。

G：そう。みんなもう何もないこととして終わったので。

Q：何にもなかったようにまたいつもどおり戻ってっていう。

G：うん。

Gさんは、いじめ加害者の当事者であった認識された人気をもつ生徒自身が、いじめが終わるきっかけを作ったことについて「それがなかったら。うん。多分一生終わんなかったんだろな」と語っており、その生徒が学級に対して持っていた影響力の大きさが伺える。そして、「その話について他の子と触れたりとかって言うのはもうなかった」とあるように、Gさんがいじめの被害者となっていた一連の出来事については、友人関係が形式的に元に戻った後も、語られることはなかったという。長期間にわたって続きたいじめであったにも関わらず、「みんなもう何もないこととして終わった」と、まるでいじめが生じてなかったかのように、Gさんに接していた様子が語られた。

認識された人気を持つ生徒がいじめに関わっていた1事例を取り上げたが、Gさんの語りからは、学級全体を巻き込むようないじめであったことが伺える。また、今回の語りでは取り上げていない部分ではあるが、いじめ加害者は集団を形成し、実際に行われていたいじめ加害行為が、認識された人気を持つ生徒からの直接的な指示によるものだったという。加えて、認識された人気を持つ生徒は、学級の人間関係のみならず、その雰囲気など含む学級風土に対して大きな影響を持っており、直接的な指示がなくとも、学級の成員がその影響下に置かれていたことが語りから伺えた。

5. 考察

本研究では、近年、いじめの抜本的な要因であると注目されつつある学級内地位について、中学生を対象としたアンケート調査より、（1）学級内で「認識された人気」、「ソシオメトリック人気」を持つ生徒たちの存在と学級風土との関連を検討し、大学生を対象とした解雇的なインタビュー調査より、（2）学級内で「認識された人気」、「ソシオメトリック人気」を持つ生徒たちの様相および、「認識された人気」を持つ生徒たちがいじめに関わっていた具体的な事例について検討することを目的としていた。以下より、それぞれの調査で得られた結果

をもとに考察を行う。

中学生を対象としたアンケート調査からは、「認識された人気」と「ソシオメトリック人気」の両者とも「思い浮かぶ」と回答した割合が過半数を占め、国内においても弁別され得る概念であることが明らかとなったものの、「認識された人気」と「ソシオメトリック人気」で同じ人物を思い浮かべたと回答した割合が17%であり、それぞれが重なり合う概念である可能性も示唆された。この結果は、「認識された人気」と「ソシオメトリック人気」はどちらも学級内地位の高さを反映するため、概念同士が重なり合うことを指摘している知見と一致している (Bowker et al., 2010)。また、相関分析においては、「認識された人気」と「ソシオメトリック人気」との間に中程度の正の関連 ($r = .44, p < .01$) が見られたが、こちらも欧米における知見 (de Bruyn & Vanden Boom, 2005) と一貫した結果が得られたと言えよう。また、「認識された人気」と「ソシオメトリック人気」の自己認知と学級風土の下位尺度である「リーダーの有無」「満足度」との関連については、相関分析および偏相関分析の結果より、「ソシオメトリック人気」と「満足度」との間に関連があることが明らかとなった。特に、「認識された人気」と「満足感」については、相関分析ではやや弱い正の関連がみられたものの、「ソシオメトリック人気」を統制すると「認識された人気」と「満足感」との間の関連がみられなくなったことから、学級内地位の高さを反映する「認識された人気」の自己認知が高くとも、学級における「満足感」とは関連しないことが示唆された。

続いて、大学生を対象とした回顧的なインタビュー調査より、「認識された人気」および「ソシオメトリック人気」を持つと考えられる生徒たちの様相を概観した。まず、「認識された人気」を持つ生徒たちは、〈ムードメーカー〉〈逆らえない〉の2つ観点を中心に語りが構成されているものの、語り手によってその印象や様相にばらつきが見られ、全体を通して、ポジティブ・ネガティブ両面への言及をしていた語りが多くみられた。こうした結果は、鈴木 (2012) のインタビューと類似している部分が多く、鈴木 (2012) は「スクールカースト」で高地位グループであることは、リーダーシップや周囲への影響力がある反面、必ずしも好かれているわけではないということを指摘している。次に、「ソシオメトリック人気」を持つ生徒たちに関しては、「認識された人気」と異なり、比較的一貫したポジティブな側面が語られており、また、学級委員や生徒会長といった立場を任されていたことが多くみられたことから〈人望の厚さ〉の観点から語りが構成されていたといえよう。こうした語りは、量的な研究で明らかにされている知見ではあるものの、ソシオメトリック人気と向社会的行動との間に正の関連を示す先行研究 (Gangel et al., 2017) と一貫した結果であった。最後に、「認識された人気」を持つ生徒がいじめと関わっていた事例について、本研究では、語り手自身がいじめの当事者であった1事例を取り上げ、語りの概観を行った。その結果からは、認識された人気を持つ生徒がもたらす影響が、いじめ加害行為等を示すネガティブなものである場合にはとりわけ、そのいじめが深刻化する恐れがあることが示唆されるだろう。加えて、学級全体が「認識された人気」を持つ生徒に対して〈逆らえない〉と感じている状況下では、教師を始めとする

第三者の介入をなくして、いじめが収束に向かうことはないだろう。紙幅の都合上、結果部分では語りを引用できなかったものの、本研究で取り上げた事例では、教師がいじめ問題に対して向き合っていない実情もみられ、結果的に「認識された人気」を持つ生徒本人の言動をきっかけに、いじめが収束向かったことが語られていた。「認識された人気」を持つ生徒たちは、その影響力の大きさゆえに、彼らの言動は周囲から黙認されやすいことが伺える。従来、いじめの発端となるような加害生徒は、攻撃行動を示すがゆえに周囲から拒絶されやすい

(Cillessen & Borch, 2006) との指摘がされることも多かったが、学級内でのいじめを扇動する生徒らの性質を考えると、加害生徒はむしろ、学級内で中心的な立場、すなわち、「認識された人気」を持つ生徒たちである場合も十分に考えられるだろう。そして、本研究の事例にもあったように、「認識された人気」を持つ生徒の一存でいじめの発生や収束が生じてしまうような環境下では、安心・安全な場であるべき学級の本来の機能が果たされていないと考えられる。そのため、いじめの発生予防を考える上では、学級内で生じる「認識された人気」に焦点を当て、そうした人気を持つ生徒たちの影響力の大きさを、教師を始めとする第三者が十分に理解することが重要であると考えられる。

最後に、本研究を総括し、研究の限界と今後の展望を述べたい。はじめに、本研究の限界点として、「認識された人気」や「ソシオメトリック人気」が学級風土にどのような影響を与えられるかは明らかにできていないことが挙げられる。本研究は、1時点のアンケート調査であり、因果関係は推定できておらず、「認識された人気」が生じやすい学級風土が存在する可能性も十分に考えられる。そのため、今後の研究においては、年度の始まりに合わせた縦断的なアンケート調査が必要と考える。また、インタビュー調査においては、「認識された人気」がいじめに関わる事例の少なさが挙げられる。今回の調査では、「認識された人気」および「ソシオメトリック人気」の生徒たちの様相を具体的に描き出すことも目的の一つであったため、いじめの経験の有無を問わずに研究協力者を募った。しかしながら、「認識された人気」を持つ生徒がいじめに関わる事例を検討する場合には、倫理的配慮を求めた上で、今後の研究においては、学級におけるいじめの経験の有無をインタビュー調査の研究協力者の条件として設定することが必要であると考えられる。

謝辞

アンケート調査およびインタビュー調査にご協力いただいた皆さま、関係者の皆さまにこの場を借りて厚くお礼を申し上げます。

文献

- Caravita, S. C. S., & Cillessen, A. H. N. (2012). Agentic or communal? and bullying in middle childhood and early adolescence. *Social Development, 21*, 376–395.
- Gangel, M. J., Keane, S. P., Calkin, S. D., Shanahan, L., & O'Brien, M. (2017). The association between relational aggression and perceived popularity in early adolescence: A test of competing hypotheses. *The Journal of Early Adolescence, 37*, 1078–1092.
- 伊藤亜矢子・宇佐美慧（2017）新版中学生用学級風土尺度（Classroom Climate Inventory; CCI）の作成 教育心理学研究, 65, 91-105.
- 小杉考司（2014）学校適応感尺度 FIT の開発 山口大学教育学部広報部編, 64, 69-82.
- 久保田真功（2018）クラス内ステータスの構造とその発生メカニズムの検討:中学生を対象とした質問紙調査をもとに 教職教育研究:教職教育研究センター紀要, 23, 43-54.
- 水野君平・唐音啓（2019）仲間関係研究における「スクールカースト」の位置づけと展望 心理学評論, 62, 311-327.
- 森口 朗（2007）いじめの構造 新潮社.
- 村上達也・西村多久磨・櫻井茂男（2016）家族、友だち、見知らぬ人に対する向社会的行動—対象別向社会的行動尺度の作成— 教育心理学研究, 64, 156-169.
- 鈴木翔・本田由紀（2012）教室内（スクール）カースト 光文社.
- 高橋史・佐藤寛・野口美幸・永作稔・嶋田洋徳（2009）中学生用攻撃行動尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 行動療法研究, 35, 53-66.